

今も続く水と共にある暮らし

川端をめぐる水の文化 針江生水の郷

土地柄が独特の水文化を生みだした

莫大な量の水をたたえ、近畿地方の約1300万人の命と暮らしを支えている琵琶湖。周辺には、古くから水に関するさまざまな生活文化が発展してきた。その中でも、湖西に位置する高島市新旭町の針江地区は、「生水の郷」として広く知られている。

ここは、背後の比良山系に降った雪や雨が、何年もかけて伏流水となり、やがて琵琶湖に流れこむ土地。豊かな湧き水があるため、昔から人々が住み、集落をつくってきた。

この針江地区の各家々では、豊富に湧き出す地下水を生活用水として利用しており、そのために設けているのが川端と呼ばれる水仕事用の施設である。「生水の郷委員会」の石津文雄さんによると、「かつては、琵琶湖畔のあちこちに川端はあったそうだが、今これだけまとまって現役で使われているのは針江地区だけ」とのこと。

もちろん、水と水路をきれいに保つには、各戸の協力が欠かせない。昔からこの地域では、それぞれの家で水をどう扱うかという、きちんとしたルールと信頼関係があった。

「川端は、地下水が湧き出る『元池』と、その周囲の『坪池』や『端池』で成り立っていて、私たちは、それぞれをうまく使い分けているんです」と石津さん。

具体的には、元池の水は、いちばんきれいな水として飲み水や炊事に使われる。次の坪池では野菜などを洗ったりするほか洗顔などもし、さらに次の端池では鍋や食器を洗う。器についたお焦げや食べかすなどは、そこに放されている鯉たちのおエサとなり、水をきれいにしてくれる。「魚たちとうまく付



坪池の水で野菜を洗う。家の中で段階的に使われた水は家の前の水路に入り、また隣家の端池につながる。そして再び水路に戻って、やがて琵琶湖に流れて行く。これらのシステムの総称が「川端」だ



町を流れる「針江大川」の水は、ほとんどが湧き水のため、年間を通して水温が一定に保たれている。夏は冷たく冬は温かいので、「真冬には蒸気が上がることもあります」と石津さん



都会での雑踏から離れて川端の生活体験ができるよう、古い民家を利用した宿泊施設も用意されている(自炊のみで要予約)



針江地区の中心に位置する公民館前の公園には水車が設けられており、夏には周辺の水辺で豊かに梅花藻の花が咲く



小学生の登校路にある川端には「御自由にお飲みください」の文字が。夏場など、子どもたちが喜んで飲んでいくという

「生水の郷委員会」問い合わせ先

TEL:090-3168-8400

ガイド料:1,000円/大人1人(小学生以下無料)

※ガイド料は、地域の環境整備や保全などのために使用されている。

<http://www.geocities.jp/syouzu2007/>



案内役の石津さんの本職は農業で、この地域で有機農法を行っている。絶滅しかかった地域固有の生き物の生息環境の再生や、渡り鳥の生息地づくりにも努めている

き合いながら、水を大切に使う工夫が古くから受け継がれてきたんです。

石津さんが副代表をしている「生水の郷委員会」が誕生したのは今から5年前のこと。そのきっかけは、NHKハイビジョンスペシャル「映像詩 里山・命めぐる水辺」の中で、琵琶湖畔の生き物たちの生態とともに、この地の川端の暮らしが紹介されたことだという。

「地域の自然、景観、湧き水の文化などに関心を抱いた来訪者が一気に増えたのですが、その中の、心ない一部の人が個人の家を覗き見たり、炊事場の道具を動かしたりしたことから、住民が不安感を持つようになったんです。そこで町の有志が集まって、地元の人々が安心してきて、来訪者も満足して見学ができるようにと、ボランティアの組織を作りました」

同会では、落ち着いて町を見学したい人たちに対して、有償でガイドを実施している。集落を巡る水路網や湧き水を利用した川端を見学し、さらに、川に戻された水を最後に浄化する琵琶湖畔のヨシ群落にまで足を伸ばす。「水は森から生まれて琵琶湖に流れ込みます。それらはすべてつながっているんです」と石津さん。

昔ながらの佇まいを色濃く残す静かな旧家が並ぶ針江の町を歩くと、水路を流れる澄んだ水が各所で目にとまる。この町の人たちは、湧き水だけでなく、これらの水も含めて、自分たちの周りにある水を「しよず」と呼ぶ。その名の通り、この地の清らかな水は、まさに「生きた水」「生きる水」「命の水」なのだといふことが感じられてくる。

(文責・CEL編集室)

CEL



自然の浄化作用の上で重要な役割を果たすヨシ群落。地域の子どもたちやボランティアの方々とともに再生に向けたさまざまな努力があった



琵琶湖畔の船着場。魚と野鳥の豊かな生息場所でもあり、かつての琵琶湖周辺にはこういう景色が広がっていたという